

高知県教育振興基本計画推進会議における連絡会議の議事概要

- 1 日 時 平成22年9月17日（金） 13：30～14：40
- 2 場 所 高知県教育センター分館 2階 中講義室
- 3 出席者 ○委 員：岩塚委員、加藤委員、時久委員、森委員、村岡委員
○県教育委員会事務局：教育政策課長、生涯学習課長、全国生涯学習フォーラム推進課長（以上代理含む。）、その他教育委員会事務局職員
- 4 概 要

議題 「教育の日」について

<事務局から資料1、2、参考資料を説明>

<意見交換>

(委員)

コンセプトはもっとはっきりと打ち出した方が良い。今のコンセプトだと、薄く広くといった感じになっていて、捉えどころがない。

(委員)

「高知教育の日」の制定のきっかけは、振興基本計画推進会議の中から出てきたと思うが、その時のビジョンは何なのか。

(事務局)

今後の教育は学校だけ頑張っても厳しい。家庭・地域をもっと巻き込んでいく必要がある。そのためには、皆で教育のことをもっと考えてもらうきっかけが必要ではないかという考え方である。

(委員)

そういう意味では、このコンセプトに近いと思う。

(委員)

高知県の教育風土について、会議で議論されたことがすごく印象に残っている。「生

涯を通じて学習をし続けていくところに人間の生き方とか、あるいは生きる価値、値打ちがあるのではないかということを、県民が共通項として持っていたら良い、「分かることが分かる、できないことができるということが、喜びになるはずである」、「目的を達した時点で、学びから逃避してる人たちが多いのではないか」、「人間はやはり、生涯学び続けるところに意義があるという点から、高知県の全体的な教育風土を醸成していきたい」といった意見が議論の中で出たことを覚えている。

(委員)

そういう意味では、「教育の日」を、教育の在り方について考える1日、あるいは1週間にすることはすごく値打ちがあると私は思う。この趣旨の1に書いてある「関心を高める教育」は、今の教育の在り方について考えることが、いろいろな形で進んでおり、本当に難しいことだと思う。だから、考えるきっかけとなるような情報はどんどん出していこうというのが目的の1つである。

(委員)

「教育の日」について議論されるようになり、他県で制定されるようになってきた経緯を辿ると、教育の外の世界の景気が良く、忙しくて教育へ目が向けられなくなったことから、「教育の日」を制定することによって注目を集めようとした時期があったと思う。その後、「開かれた学校づくり」と呼応するように、今度は教育へいろいろな方が介入し過ぎてきて、保護者の期待と学校の価値観がぶつかるようになってきた。あまりにも出過ぎた行動からは、学校を守らないといけない状況もある。そろそろ落ち着きを取り戻す時期だと思うが、そういうことを考えると、短期間で「こういうことへ着目しましょうよ」「教育というのはこうあるべきでしょう」と発信するような日にするならば、概ねこの形でいいのではないか。

それから、学校は学校、家庭は家庭という線引きもこれから必要になってくるのではないか。前にも述べたが、数年前から、「子どもさんが校門を越えてうちの学校の中に入ったら、うちの空間の価値観で動きます」とあえて言うようにしている。学校には学校の価値観があり、保護者の方もそこは認めて下さっていると私は信じている。

そういう意味では、情報を発信することが大事である。学校はこういう視点に立っているということをこの時期に提示し、「これから次の1年間はこういうことを中心に頑張りましょう」といった打ち出し方にすると、割合インパクトがあると思う。

(委員)

価値観の多様化に伴って、保護者の方々の教育に対する考え方に随分温度差が生じている。そんな状況の中、非常に多くの教育に関する事業が実施されている。ところが、それが全部単発になっているために、それぞれの力が分散されているという感じ

がする。「教育の日」を含めて1週間ぐらいの期間に集中することによって、県としても教育に対する考え方を県民に発信することもできるし、逆に今までやってきた事業自体の効果も上がるのではないだろうか。そういう面で、「教育の日」は起爆剤になるのではないかと思う。

(委員)

これだけだと学校や教育機関だけが対象であるという印象がすごく強いので、意見にあったように「学び続ける風土をつくる」という言葉をどこかに入れるべきだと思う。「高知というのはそういう風土ですよ」という意味で入れたらどうだろうか。

(委員)

だから、生涯学習の部分が出てくる。他県の例でも多いが、「こうち」とひら仮名にしたことはどんな意味があるのか。

(事務局)

趣旨としては、子どもも含めて皆が参加できるようにという意味で、あえて漢字を使っていないことだと思う。

(委員)

「龍馬博」のキャッチフレーズに合わせて、「志の国 高知 教育の日」にしたらいと思うが。

(委員)

確かに、どこの県も金太郎飴みたいに「教育の日」ではなく、何かキャッチフレーズがほしい。短い言葉で。

(委員)

本山町が今年で町制施行100周年を迎える。その意識付けをどのような形で、1年間かけて行うのかということについて議論したときに、「100周年ということに位置づけているいろいろなことを行うことそのものが、意識付けなのではないか」という意見があって、もちろん式典も行ったが、後のいろいろなイベントは全部「100周年」を冠にして実施することになっている。

「教育の日」を考えた時、町村がやはり教育力をどう高めていくかが大切である。地域の教育力を高めていくことがなかったら、高知県全体が高まることがないと思う。「教育の日」というものを契機にして市町村の教育力を高めていくことを模索したい。

逆の言い方をすれば、こういうことがない限りやらない。「毎年 11 月の最初の 1 週間は「教育の日」となるから、このことを理由付けにしながら地域の教育力を高めることを皆で考えてみよう」とすることで、多くの市町村では、それが考えるきっかけとなる面もあると思う。

(委員)

「志の国 志国」はとっつきやすい感じがする。学校では、「当然こういう言葉が分かるでしょう」という世界で話をしているが、学校や県庁で話している言葉は、専門用語であって、一般市民にはあまり関係ない。

(委員)

全くそのとおり。私もよく言われる。「俗に言う業界用語はやめてや、わしらに分かん」と。町議会でも「議会って分かっていますか、教育の素人に専門的な内容を分かりやすく説明するのが議会。だから、そんなに業界用語を使こうたらいかん」と言われた。何気なく使っているので、自分では分からない。

(委員)

教育というと結構堅苦しいイメージがあるが、全国の例を見ると、和歌山で「学びの日」という名称がある。名称については、やはり「教育の日」の方が良いのか。

(委員)

確かに教育と言うと、違和感を感じたり、特定機関の仕事内容という感じを受ける。かといって、良いネーミングもすぐには浮かばない。

(委員)

今度の 11 月 22 日。こうしてフォーラムで高まってきたもの、培ってきたものを、是非、来年度も引き続いて燃やし続けていってもらいたい。前にもお聞きしたが、フォーラム実行委員会にマスコミは入っているのか。

(事務局)

委員ではないが、参与という形で入っていただいている。

(委員)

テレビや新聞など、何らかの形でマスコミの人たちに主体的に関わっていただけたらと思っている。参与とは、具体的にどういう形で関わっているのか。

(事務局)

いろいろな意見やアドバイスをいただくという立場だが、実行委員会の時は委員さんと同じように意見をいただくようにしている。ただ、教育宣言では権限がない。

(委員)

今、不登校の子どもがいる家庭など、切羽詰まってどうしようもないという状況に追い込まれている家庭がたくさんある。経済面などで切羽詰まった状況の中で、きりきり舞いしていることの歪みが、子どもが中学生になった段階で出てきたりしている。そこに至るまでにどのような手を打つべきかというところ、結局、幼児期からどんな関わり合いが必要かというところに戻ってくるので、その辺りに視点を当てて、皆がじっくり考えていく機会が必要である。学校教育にしても、高知県の風土ということにしても、毎年何かテーマを持って見つめることも大事だと思うので、そういったテーマをどんどん打ち出していこうとする意気込みがとても大事である。

生涯学習の視点から見ると、いろいろな施設や講演、活動が続けている団体があるので、そこが一斉にドンとやってくれたら、それだけで高知県らしい取組になる。

(委員)

確かにそう思う。「高知の良さ」については、振興計画の策定の時も、マイナスの面ばかりを挙げるのではなく方向転換を図る意味で大きく議論した。

(委員)

そうした経験がその後の「学ぶ動機」にかかってくると思う。小さい頃にモチベーションを作らなければ、およそ学ぶ感動も何も起こらない。子どもが自然の中での遊びを通じて、いろいろな事に関心を持つことができれば、その後の教育はしやすいと思う。

今の学校教育は答えを求め過ぎるように思う。昔の子どもはやりっぱなしで怒られたり、褒められたりしながら溜め込んだ経験がある。学校教育の中でも「もっと子どもに体験を」と取り組んでいるが、生活科などの学習の時間にきれいにまとめてしまう。「こんな活動をしました」「みんなこれで分かりましたね」と。でも、そんな活動で溜め込んだものは少ししかないので、この豊かな高知県の自然や人ともっと出会ったり、学校と地域が一体になって行うことができることについて「これもできますよ」「こんな所に行ってみませんか」と呼びかけることだけでも必要だと思う。やってみたいなと思うことだけでも良いと思う。

(委員)

今まで教育は偉い人の専売特許のようなイメージで、学校教育など狭い範囲が教育

の全てみたいに使われている。「教育の日」を考えると、教育関係者だけの狭い範囲で制定するのではなく、もっと幅広く教育の関係者以外の方にも話してもらった方がいいのではないと思う。生涯学習フォーラム実行委員というのは、多種多様な方が入っているので、そこを県民会議に掛けてメンバー制にする形はどうか。「ここがやりゆうから、他は関係なし」ではなく、横に手を繋いでいく。例えば演劇の行事でも、1日公演の予定の演劇を2日にして、子どもたちにも参加してもらったり、ワークショップを開催する形にもできる。

いつも思うが、よきこい祭り、あるいは国体、パラリンピックの時の皆のエネルギーや、台風の後片付けの時の努力などはすごい。本当は泣きたい時に、生き生きとしている県民性。こういう部分を私は煽りたい。

(委員)

外国では日曜日は動物園や美術館がタダになる。日本は逆で、休日は余計に人が入るから「稼ぎどき」となる。「教育の日」には、子どもたちのためにいろいろな施設の入場料をタダにすることも良いかもしれない。

(委員)

今、小学校で、「道草をしないで帰りましょう」といった取組は行われているか。

(委員)

今、地域の安全を守りたいという有志の方がたくさんいるので、その方達がジャンパーを着て、子どもたちをガードしてくれている。おそらく子どもたちは、道草など考えない。

(委員)

知らない人に話しかけられても、返事をしない。「知らない人からは、2m以上離れて話をしなさい」と。歩くこともなく、校門まで親の車で送迎してもらっている子どもも多い。

(委員)

家の方が忙しいから、保育へも預けっぱなし、学校へも預けっぱなしで中学生になる。

(委員)

今はそんな時代になっている。家の人も子どもを預けて働かざるを得なかったり、働くことに意味を求めていたり。だから、家庭の在り方というものが、お母さんが帰

ってきたら、子どもは寝ているとか、ご飯を食べていないとか、そのようなサイクルで悪循環している。

都会と高知県で子どもの状況は違うかもしれないが、高知県の状況が良いわけではない。踏ん張りが利かない、頑張る意欲がない子どもたちの数が増えてきている。親も子どもに言うことを聞かすことができていない。怒ったら暴れる、物を投げるという子どもに、お家の人もお手上げ状態になっている家庭もある。それがずっと続いてくると、子どもは不登校になったり、逆に非行気味になったりして、親子の関係が断絶している家庭もたくさんある。

だから、そこに至る前に、親の言葉が通る、家庭の中でしっかりとした方針があるという家庭をつくる必要があるので、「もっと人間を育てる」、「この子どもたちが大人になって、親になった時にちゃんとした子育てが出来るような人をつくる」という視点に立つことが必要だと思う。

(委員)

今は不登校がすごく多い。その原因の一つが、核家族化だと思う。昔は複合家族で、いわゆる子育て文化というものが、順番に我が家にあった。これがなくなって、若夫婦だけになっていることが一番大きな原因ではないか。家族というものがだんだん変わってきて崩壊してきているように思う。

それを、元通りにすると言ってもなかなかできないので、子育て文化の継承、家庭の文化の継承ということに思いをもって取り組む必要がある。本当に高知県は危ない状態である。学校にいる子どもたちは元気そうに見えるが、その中でも迷ったり困っている人はたくさんいると思う。「教育の日」という時に、もっと高知県の子育ての在り方という部分で幼児教育や大人の支援を考える必要がある。その裏には経済的な問題など、大きく根本的な問題があると思うので、「こういう子育てをしていきましょう」、「こういう社会を作りましょう」といったことを、丁寧に毎年打ち出していくことが大切だと思う。

(委員)

子どもが幼児の頃は、親は課題意識を全然持っていないが、実はもうそこでゆがみが生じてきている。

(委員)

幼児は、大人が考えているよりはるかに物事を吸収しているし、考えているし、分かっている。3歳ぐらいで完全に分かっている。

(委員)

最初子どもが生まれた直後は、当然だが親も初めて、子も初めてで、親の勉強期間でもある。その時期におじいちゃん、おばあちゃんが預かってくれる環境というのは大きい。

(委員)

「子どもさんが成長しているでしょう、お母さんも成長していくんですよ。だから、一緒に成長していくんですね」とよく言われるが、確かにそうだと思う。

(委員)

核家族で、必死で親子の関係だけで子育てをしていたら、ヒステリックになる時もある。

(委員)

だから、虐待が起きることについては分からないこともない。自分の思い通りにならないからだろう。ただ、最近の家庭を見ていて感じるのは、父親が不甲斐ないこと。父親がきちんと子育てに参加していない家庭に課題がある。やはり、父親がきちんと家の柱としているということが大事かと思う。母子家庭、父子家庭は関係ない。

(委員)

意識を向ける、変えるためには参加してもらったり、接触してもらい機会を増やすことが基本になると思うが、その場合、参加して得をした形にすることが必要である。すぐ思いつくのは金銭的に得をする形。「〇〇は無料です」とか、「県の事業関係について無料です」とか。ただ、それだけで終わるのではなく、各市町村等の教育について、協力を得る必要があると思う。とすると、各市町村がその日に何を実施するか。県民にどうやって得をさせていくのかということを示していく。得をすることがないと近頃の人にはなかなか行動してくれない。

予算を取ることは難しいかもしれないが、人が来なくても構わないという意識でやってもらいたい。事業は、参加人数が少ないと中止になる傾向があるが、そこで我慢をしてどれだけ続けられるかということは、行政としての「腹決め」だと思う。腹を決めて「教育の日」というものを積み上げていくことが大事だ。

(委員)

大人が全部しつらえるという感じがする。高校生ぐらいになったらかなり機動力があるし、子ども準備会議みたいなものを開催するのも良いかもしれない。

(委員)

各地教委の方がいろいろアイデアを出すことができる。どこが母体になるのかは分からないが、関連している所にアイデアを出してもらいながら、行事をまとめ込んでいく形が良いだろう。その時に、「志の国教育の日」というものを看板で掲げていく。それによって、「この事業は、こういう想いでやっているんですよ」という趣旨を訴えていく。そういう形で広げていくことが、「教育の日」というものを定着させる上でとても大事ではないかと思う。

(委員)

各市町村で子育てや少子化が問題になるが、その前の問題である「出会いの場づくり」も大きな課題となっている。独身の男性、女性が結婚しない。それについて一生懸命計画していたら、ある人が「駄目だな。独身の男性、女性に企画をさせんといかん。こんなの大人が企画してどうして乗ってくる」という意見を述べた。

我々が作った「教育の日」ではなくて、高校生や中学生、主人公たちに参加をさせるというアイデアもいい。

(委員)

土佐の自然や家族の在り方など、「教育の日」の原点を大切にするというニュアンスが伝わるものにすることが大事かもしれない。それをもう 1 回、この日に皆で考えてみよう。

(委員)

学力の問題は確かに大きい問題ではあるが、ここは一つ原点を大事にする日、見つめ直す日として、学力については別の論じ方をしていく形が良いと思う。

(委員)

趣旨についてたくさん意見が出たが、趣旨というより宣言文という形になるのではないか。

(委員)

親たちにも、子どもをしっかり見つめる日があっても良い。本当に子どもに関心がないわけではない。だから、そういう点ではやはり「原点」があるはずである。これが高知の良さ、オリジナリティーになる。

(委員)

去年の会議の中でも議論の中で「原点を大事にする」ことは出てきている。やはり、

教育の場合、不易な部分というものが大事である。今までの話し合いの中でも、時代が変わっても変えてはならないものがあるだろうということで、「流行」よりも「不易」な部分についての話が多く出てきている。教育振興基本計画もその部分を踏まえたものになっている。

<意見交換終了>